

清明

ハラハラと風に乗って、桜の花びらが舞い落ちてくる。

ほんの少し小高い丘になっているところに植わっている桜の根元に立ち、悟空は天を見上げていた。

視界に広がる、薄紅色。

それはとても綺麗——なのだけど。

なぜか胸がざわつく。

重なり合う薄紅の間から、きらきらと光が零れ落ちてくる。それを掴み取ろうとするかのように、悟空は手を伸ばす。

——届かない。

つま先立ちになって、精一杯、手を伸ばす。

——触れられない。あの光には。

胸が締めつけられる。視界が歪んでくる。

手を伸ばしているのに。

こんなにも手を伸ばしているのに——。

「……っ！」

と、突然、足元が滑った。昨日は雨が降っていた。足元がぬかるんでいて、それで——。

手を伸ばしたまま、受け身も取らず悟空は後ろにひっくり返る。遠くなる薄紅色。

ハラハラと、まるで桜が涙を流すように花びらが降ってくる。

このまま涙の海に沈んで——花びらに埋もれて、もうなにも見えなくなって——……。

だが。

「なにをしている」

光が差した。

腕を掴まれて引つ張り上げられる。そして、強い光はすぐ近くに——。

「三蔵っ」

悟空はぎゆうっと三蔵にしがみつく。

——捕まえた。ようやく捕まえた。

安堵で眩暈がしてくる。と、頭に手を置かれた。

そうされていると、とても——安心。

ほおっと大きく息をつき、悟空は顔をあげた。見上げると三蔵の端正な顔が目に入る。

悟空は、笑みを浮かべるが——。

「うわっ」

急に、白い法衣に茶色の泥染みを作ってしまったことに気付く。そして周囲をよく見てみれば、眉を顰めている僧形の面々が。

「ご、ごめん」

慌てて離れようとする悟空の頭がぼんぼんと軽く叩かれる。三蔵が周囲に視線を向けて言う。

「湯あみをしてくる。先に行っておけ」

僧たちは不承不承離れて行く。

辺りに人の気配が消え、静かになったところで。

「ごめん」

改めて悟空は言い、そっと三蔵に身を寄せる。

——温かい。

キラキラと降り注ぐ光に包まれる。柔らかな春の日差しは穏やかで。

——生きている。

それを実感する。

ここに三蔵がいる。だからもう——悲しむことなどなにもない。

桜が咲いてからずっと続いていた胸のざわめきが消え、ようやく悟空の表情も穏やかになった。